書評・H・スピーゲル著『ブラジル經濟論』

H. W. Spiegel, *The Brazilian Economy*: Chronic Inflation and Sporadic Industrialization 1949

細野重雄

一　ブラジルはラテン・アメリカの面積の半分を占め、ソ連、中国、カナダについで、世界第四番目の広さをもつている。アメリカ合衆国やオーストラリヤよりも広いばかりでなく、その一部分であるアマゾン流域だけでも、欧州大陸をすつぽり入れてもまだ余裕があるという広さである。たゞ単に広いというばかりではない。*The Amazing Amazon* の著者によると、今度の戦争でチャーチルはアマゾン・ランドが連合国戦力にとつて重要であるという注意を喚起し、ルーズベルトは戦勝のためにブラジルの協力が要ると解いた。さらにマーシャルは、戦争末期にアマゾニヤなくしては戦争は勝てぬ――必要というのでなくて「不可欠」なのだと、声明したそうである。

ブラジルの未利用資源がこのように戦争を契機として連合国側によつて開発されようとした。かかる事態を背景としてブラジル研究は戦前とちがつた様相を呈したかのごとくである。ブラジル中央銀行は世界銀行の指導によつて国民所得その他の経済統計 *Relatario* を出し始め、アメリカのヴァンダービルト大学におけるブラジル研究所は矢つぎ早やに研究報告を出している。アメリカ政府はパンアメリカン・ユニオンを主催し、国連はECAFEと同格のECLAを設置している。ロンドンで出版された『面白いアマゾン』は出版後直ちに売り切れ、わたくしが入手したのは三版である。

スピーゲルのこの著書は、こういう流行に乗つて出版されたものではないが、流行の主流をなす著書の一つにちがいない。二四六頁の小冊子であるが、すこぶる野心的なもので「主要な、現下の問題を説明すべき分析が容易に入手できない」（はしがき）現状にかんがみて、ものしたという。著者は、ワシントンのキリスト教大学の副教授で、Guggenheim 奨学資金を得て、ブラジルに渡航し、大蔵省や中央銀行で資料を蒐集、蔵相、中銀総裁、をはじめとして要人、大学教授らと意見を交換して本書をまとめ上げたものである。統計表は二九しかないが、それらはすべて著者が加工、圧縮したものであつて、資料的価値に富んでいる。表にかぎらず、とりまとめられた数字にはしばしばアメリカとの比較があげられているので、後進国経済を理解するのに親切である。そして、それらの数値はブラジル経済の形態学の特徴をよくあらわしているのであつて、すこぶる経済資料価値に富んでいるのである。

二　しかし、本書の目的は「説明的解析」であつて、資料的価値のみに終るものではない。このためにいささか内容の紹介にふれ

ねばならぬ。本書は左のごとく、五部、一四章にわけられている。

第一部　所得、価格および財政（一～四章）
第二部　人口と労働の問題（五～六章）
第三部　貿易と投資（七～八章）
第四部　農業問題（九～一一章）
第五部　工業開発（一二～一四章）

この目次から推察できるように、著者の出発点はこの国の動的な経済構造であつて、この構造の「説明的解析」が本書の構成である。自然と歴史は与件であるからほとんでふれていない。ふつうブラジル研究者がとりあげる尨大な未利用資源についてもこれを省略するという徹底したものである。著者が対象とした経済構造は政府の意志と外国の影響（貿易と外資）のからみ合つたもので、著者が親しく体験した合衆国のごとき先進資本主義国のそれとは、全くちがつたものであるということをとくにとり上げている。それは本書の副題が示すように「永続的なインフレーションと散発的な工業化」に集約されるであろう。

著者がはじめて計算したと註記しているが、一八四〇年から一九四五年にいたる一〇五年間に通貨は四四四倍、輸出高（金額）は二九二倍、歳入は五〇九倍、卸売物価は二八倍、輸出単価は三四倍、磅価格は公定で八・六倍、自由価格で一〇・二倍になつている（第五表）。その間帝国から共和国へという大変化があつたが、全くの無血革命で、幣制が飛躍的に改まるような変化でなかつたから、経済的には継続的な変化があつただけで飛躍はない。インフレーションはまさに永続的に進行したのである。継続的物価騰貴と通貨価値の下落は生産者にとつても、輸出商にとつても手取高を生産費の騰率より大きくするから、それだけ有利になる。そのことは投資率を有利にする。通説によれば継続的インフレーションは恐慌をもたらす。あるいはハイエクのごとく、インフレーションは過度の低利子率からもたらされるというのも同じである。しかし、これらの説明はブラジルのインフレーションを説明するものではない。著者は、この理由としてブラジルでは消費者需要が重要ではないからである、としている。貴銀水準と国民大衆の購買力が低いので、消費財に働らく投資の影響は低からざるをえない。そのうえ贅沢品の需要は喚起されるが、輸入でまかなわれる。しかも投資対象たる不動産はあり余つているのである。ブラジル経済におけるインフレーションの刺戟はその正常経済に適当であつたのである。

著者が問題とした「散発的工業化」はこの国の経済的ナショナリズムと裏腹をなすものである。著者は、通説のとおりデモクラシーなき工業化は日本やドイツの例からみて世界秩序の維持上危険であるとしている。ブラジルは、各州政府が兵隊をもつというアメリカ合衆国以上の地方分権主義であり、中央政府の歳入はつねに歳出よりも少なく、歳出のうち二割は外債の利子と償還にあてられているというように、中央政府の弱体はストラティジックな工業化を阻止してしまう。この国における経済的ナショナリズ

ムの最初の抵抗は、高率輸入関税においてあらわれたが、三〇年代の恐慌下においては公社制度を採用して流通部門とくに輸出商品の独占をはかり、製鉄、冒気、交通等基本産業における外資の漸進的排除策をとつた。その方向は第二次大戦になつてますます進められたのであるが、幸いにして戦争の利益のみを享受した結果（例えば貿易条件の好転、アメリカの援助）それらの政策は破綻せずにすんだのであつた。外国の援助なくしては立ちゆかぬ経済的ナショナリズムがストラティジックな工業化を制約したのである。しかしその根底はこの国の資本蓄積が僅少なためである。例えば一九四一年におけるこの国の工業生産高は一一億ドルであり、アメリカ合衆国の二%にすぎない。ある人の計算によると、四億ドルの追加投資をしたらアメリカの四%にまであげることは容易であるという。その投資計画の四五%は鉄道建設であるというから、この国の投資は基礎的産業の領域でも皆無でないにせよ、なつていないということである。したがつて、投資は補完的産業が欠除しているために選択的・集中的たらざるをえない。この国の工業化の散発性はここに起因すると、著者はのべている。

これを要するに、第一部と第二部はブラジルの経済構造を分析したもので、それぞれ高利潤と低賃銀が結果することに要約できる。第三部は経済活動の起動者たる外国資本の機能をとり扱かい、資本の機能する場として第四部の農業と第五部の工業の問題が論ぜらている。本書でかくべつ方法論を展開していないのは、目次が方法論を兼ねているからでもあろう。

三　スピーゲルの方法は、後進国経済における外資の効果と弱体な財政、そのレジスタンスたる工業化に焦点をおき、土地問題のごとき歴史的・制度的の問題は多くは軽く取扱い、もしくは無視している。かれの理解する経済学的説明はインフレーションと工業化を覆うことはできたが、この国の国民の七六%が就業している農業や、この国が欧米経済に不可欠とされる面のかずかずの場面を説明していない。なにゆえにアメリカが経済援助をなし、なにゆえにイギリスが、イギリス全般からみて大した額でもない投資を引きあげたかというような問題の「説明的分析」を欠いている。また、なにゆえに南北アメリカを通じて最大の党員を擁した共産党を、一九四七年に非合法化したかということも説明していない。いわんやこの国の軍備の経済的説明もない。

著者の扱つた経済の形態は、財政および外資によつてゆり動かされている現実の姿であるが、資本家の主体性についてメスを入れなかつた憾みが深い。後進国経済の生々しい描写とすればこの点ではガンサーの *Inside Latin America*(1940) に劣つている。かれの方法はブラジル経済を切るという大きい抱負にもかかわらず、これらの点で限界を示している。

だが、すこぶる経済的資料に富んでおり、いくつかの経済現象の説明は有益であつて、ブラジル研究者にとつて必須の文献となるだろう。東南アジアの工業化問題はわれわれにも身近な問題であるが、その研究者にとつてもこの研究は示唆するところが少な

くない。

かれの叙述の応用的側面として、わが移民に関係するものと感じたのは、左の論理である。ブラジルが工業化すると賃銀が騰貴し、そのことは農業労働を不足させ、機械化のテンポが遅いために農業は不利となる。したがつて農業生産性の跛行は農業投資を低くして、輸出を減退させる。一方、都市人口の増加は、耕境に生産されるか、または雇農の自給用としてあつた食糧農産物の需要を増す。かくして土地侵蝕の進行防止とあいまつて農業の再編成を要する。まことにそのとおりである。わたくしのとりまとめた『ブラジルの農業』（FAO協会著）はとうていこのようなリコメンデーションの資料を提供することができなかつた。その一点だけでも、わたくしは頭を下げる。かずかずの不足はあるが、注目すべき著書であろう。